



題字揮毫・故 瀬島龍三氏

## 第 36 号

公益財団法人 大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

〒102-0073 千代田区九段北3-1-1  
靖國神社遊就館内・地階

電話 03 (6380) 8943  
FAX 03 (6380) 8952

<http://homepage2.nifty.com/ireikyuu>

振替口座 00140-6-334930

編集人 飯田正能  
発行人 岩田司朗  
印刷所 ヨシダ印刷株式会社

## 目次

|   |    |
|---|----|
| 年頭のご挨拶 (島村宜伸会長).....                    | 2  |
| 謹賀新年.....                               | 1  |
| 天皇、皇后両陛下フイリピン御訪問<br>―戦没者の慰霊検討―.....     | 3  |
| 比島(フイリピン)の戦いと慰霊<br>(その二)レイテ決戦放棄後.....   | 4  |
| ガダルカナル島の戦いと慰霊②.....                     | 10 |
| 収集活動に参加して.....                          | 12 |
| 「涙雨」ガダルカナル島第五次自主派遣報告.....               | 13 |
| イルクーツク派遣に参加して.....                      | 15 |
| ―旧ソ連抑留中死亡者遺骨収集帰還<br>派遣(イルクーツク州)報告―..... | 14 |
| 慶祝・百歳の御誕生日を迎えられた<br>三笠宮崇仁親王殿下.....      | 15 |
| 事務局からの報告等.....                          | 15 |

## 年頭のご挨拶



島村宜伸会長

新年明けましておめでとうございます。会員の皆様並びに戦没者慰霊諸団体の皆様には、御家族共々、良いお正月をお迎えのこととお喜び申し上げます。また、旧年中は、本協議会の活動に、多大の御協力、御支援をいただき、心から御礼申し上げます。

昨年は、大東亜戦争が終結して七十周年に当たる節目の年でありました。戦没者慰霊に心ある多くの団体が、この節目の年を記念して戦没者に追悼の誠を捧げる様々な集会・行事を催され

ました。また、多くの皆様が、靖國神社に、千鳥ヶ淵戦没者墓苑に、心新たに参詣に訪れられました。加えて、多くのマスコミが、終戦七十周年を記念する特集を企画し、この大戦で亡くなられた戦没者に思いを寄せる様々な報道がなされました。

中でも特筆すべきは、四月に天皇、皇后両陛下が自らの強い御意志で、先の大戦における激戦の地、パラオ・ベリリュー島を御訪問になり、戦没者の御慰霊をなされたことであります。南海の地に立たれ、英霊の御霊に深々と御拝礼になられたお姿を拝し、私のみならず、国民の多くが深い感銘を受けたことであります。

加えて新年には、両陛下が大東亜戦争最大の激戦地フイリピンを御訪問される御予定とも漏れ承っております。それやこれやを含め、終戦七十周年が、国民の多くにとって大東亜戦争と

大東亜戦争戦没者のことを改めて思い起こす良い機会になったことを感謝し、これが更に一歩進んで、戦没者への感謝と追悼の思いを育む動機づけとなってくれることを希求するものであります。

昨年の八月十五日の靖國神社参拝者は、例年を遥かに上回る十九万人を数えた由、加えて先の大戦を知らない若い世代参拝者が目立ったとのこと、何よりのことであります。また、千鳥ヶ淵戦没者墓苑においても、例年にも増して多くの人々が参拝に訪れたとのこと、これが終戦七十周年の一年だけの特別の事象に終わらないことを期待したいと思います。

なお、七月四日には、本協議会と戦没者慰霊諸団体が合同で主催した平成二十七年大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭も、お蔭様で例年を超える二七六名(在宅参拝者を含む)の御参加をいただき、感慨深く慰霊祭を執り行うこ

靖國大絵馬は、愛知県名古屋伊勢馬協賛会安田識人氏から御祭奉慰のため、昭和五十三年から毎年奉納いただいているもので、横二・七六メートル、高さ二・一九メートルのジャンボ絵馬として新春の靖國の名物となっている。



靖國神社奉納大絵馬

とができました。御協力いただきまし  
た会員の皆様並びに戦没者慰霊諸団体  
の皆様、改めて厚く御礼申し上げる  
次第です。

また、海外における戦没者御遺骨の  
収容は、昭和二十七年以来厚生労働省  
と民間協力団体の手により鋭意進めら  
れており、本協議会も民間応募団体の  
一つとして協力していますが、戦後  
七十年を経過した今もなお、一二万  
余柱が海外各地の山野に遺されたまま  
の痛ましい状況が続いております。遅  
きに失する感がありますが、終戦七十  
周年の昨年、戦没者の御遺骨収容を促  
進するため、政府挙げての体制作りと  
民間主体の実行組織作りを主軸とする  
新たな法律案が国会に上程され、九月  
に衆議院を通過しましたが、参議院で  
の審議日程の見通しが立たず、新しい  
年に持ち越されました。遷延に次ぐ遷

延で、異郷の地で帰国を待ち侘びてお  
られる戦没者に誠に申し訳ない思いで  
すが、本協議会としても引き続き関係  
議員及び関係官署と緊密に連携しつ  
つ、具体化に努めてまいります。関係  
諸団体の御支援、御協力をお願いいた  
します。

新しい年を迎え、昨年の終戦七十周  
年の余韻に浸りつつも、積み重なった  
課題を前に肅然とし、本協議会の使命  
の重大性と寄せられる期待の大きさに  
改めて身の引き締まる思いでありま  
す。今年も心新たに戦没者慰霊の諸活  
動に取り組みたいと思いますので、旧  
年同様、慰霊諸団体並びに会員の皆様  
の御協力をお願いいたします。

先ず、大東亜戦争と戦没者慰霊の思  
想の普及啓蒙への取り組みですが、国  
民の多くは、戦没者慰霊に「関心がな  
い」のではなく、実は「知らされていな

い」ことを認めざるを得ません。戦後  
七十年を経た今、初心に帰って、先ず  
「知ってもらふ」ことに重点を置いた普  
及啓蒙活動を心がけたいと思います。

また、本年も例年同様、七月に本協  
議会参加団体及び協力団体の合同の形  
で大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭を執  
り行います。高齢化が進み、解散を余  
儀なくされた戦没者慰霊団体について  
も、永代会員として、そのお名前を連  
ね、共に慰霊の誠を捧げていただく形  
を引き続き大事にしたいと思っています。  
諸団体におかれましても、今後の慰霊  
事業永続のための御要望等がありまし  
たら、是非お聞かせ下さるようお願い  
申し上げます。

次に、海外戦没者の御遺骨収容につ  
いては、今年は新しい体制に移行した  
ものの端境期でもあります。本協議会  
これまで同様、政府派遣遺骨収容団に

民間公募団体として参加する形で協力  
するとともに、新しい体制が御遺骨収  
容の抜本的促進につながるよう、実効  
性ある体制作りに積極的に関わってい  
きたいものと決意を新たにしております。  
関係諸団体の御支援、御協力を切  
にお願い申し上げます。

旧年を回顧し、新年への願いを思い  
つくままに記しました。私自身、これ  
らを頭に思い描きながら、心新たに、  
年頭の靖國神社の神前に額ずきたいと  
思います。

本年も、皆様の御協力と御支援を、  
よろしくお願い申し上げます。  
平成二十八年元旦

公益財団法人

大東亜戦争全戦没者

慰霊団体協議会

会長 島村 宜伸

株式会社 S N A

株式会社

キャリアコンサルティング

特定非営利活動法人

孫子経営塾

## 年 新 賀 謹

### 公益財団法人 偕 行 社

理事長 志摩 篤  
副理事長 塩田 章  
副理事長 深山 明  
副理事長 富澤 暉  
専務理事 白石 一  
専務理事 大越 兼  
事務局長 若木 利博

### 公益財団法人 水 交 会

会長 藤田 幸生  
副会長 古庄 幸一  
理事長 齋藤 隆  
副理事長 加藤 保  
専務理事 赤星 慶治  
事務局長 本多 宏隆

### 公益財団法人 大東亜戦争全戦没者 慰霊団体協議会

会長 島村 宜伸  
理事長 柚木 文夫  
専務理事 圓藤 春喜  
事務局長 岩田 司朗

天皇、皇后両陛下下、フィリピン  
御訪問―戦没者の慰霊検討

天皇、皇后両陛下には、本年1月26日から5日間の日程で、国交正常化60周年を迎えるフィリピンを国賓として公式訪問されることが、昨年12月4日の閣議で正式決定した。両陛下の同国御訪問は、皇太子、同妃両殿下時代の

昭和37年（1962年）以来2度目となるが、天皇、皇后両陛下の同国御訪問は初めてとなる。  
宮内庁の発表によると、両陛下には1月26日、政府専用機で羽田空港を出発され、首都マニラでの歓迎式典やアキノ同国大統領との御会見、晩餐会に御出席の予定とのことであり、また、日程の後半には、日本政府が昭和48年（1973年）3月、ルソン島ラグナ

州カリラヤに建立した慰霊碑「比島戦没者の碑」に御参拝、大東亜戦争中フィリピンで戦没した日本人を初めて慰霊される方向で調整されているとのことである。  
同国の日本人戦没者は、海外の地域別では最多の約51万8000人（軍人・民間人）で、同国の人々にも甚大な犠牲者が出た。同国人を追悼する「無名戦士の墓」への供花や、戦後に

両国の親善に尽くした人々との御懇談も検討されているとのことである。  
戦没者の慰霊顕彰に寄せられる深い大御心の忝さに頭の下がる思いである。（関連記事「比島（フィリピン）の戦いと慰霊（その二）レイテ決戦放棄後」）

謹 賀 新 年

航空自衛隊退職者団体  
つばさ会

会長 吉田 正  
副会長 藤川 壽夫  
副会長 山本 修三  
副会長 外 蘭 健一朗  
副会長 片山 隆 仁  
副会長 鹿 股 龍 一  
専務理事 長 島 修 照

公益財団法人 特攻隊戦没者  
慰霊顕彰会

理事長 杉 山 蕃  
副理事長 藤 田 幸 生  
専務理事 衣 笠 陽 雄  
事務局長 羽 渕 徹 也

公益社団法人 隊友会

会長 西 元 徹 也  
理事長 先 崎 一  
常務理事 増 田 好 平  
常務理事 吉 川 榮 治  
常務理事 吉 田 正  
常務執行役 三 本 明 世  
（総務担当）  
事務局長 植 木 美知男

一般社団法人 日本郷友連盟

会長 寺 島 泰 三  
副会長 森 勉  
専務理事 新 井 光 雄  
常務理事兼編集長  
常務理事兼事務局長 勝 木 俊 知  
理 事 富 田 稔  
理 事 倉 田 英 世  
理 事 中 村 弘

軍 学 堂

医療法人社団 伍 光 会

株式会社 青 林 堂

同 台 経 済 懇 話 会

株式会社 防衛システム研究所

株式会社 リ エ イ ト

株式会社 再 生 日 本 21

## 比島(フィリピン)の戦いと 慰霊(その二) レイテ決戦 放棄後)

専務理事 圓藤 春喜

### 一 はじめに

米軍が昭和19年12月7日にレイテ島イビルに上陸。次いで、15日にルソン島南部のミンドロ島に上陸したのを確認した第14方面軍司令官山下奉文大將は、①レイテ決戦の継続は困難、②米軍のルソン島進攻が近い、と判断し、レイテ決戦を放棄し、現地部隊に自活自戦を命じたことは前号『慰霊』第35号・平成27年9月1日発行)で紹介した。今回は、レイテ決戦放棄後の比島における戦いと慰霊について紹介したい。

### 二 レイテ決戦放棄後の作戦指導

大本営と南方総軍は、方面軍に対しレイテ決戦放棄後も比島全域での決戦を求めたが、方面軍司令官は、レイテ決戦での損耗、彼我戦力、特に海空戦力の懸隔を考慮し、「ルソン島を重視して主力を配備し、自活自戦、永久抗戦の態勢を整備して、米軍主力を比島に長く牽制拘束する」という持久作戦

を採用した。

今回は、レイテ決戦放棄後の比島の戦いの中心となるルソン島における戦いと比島での慰霊を中心に紹介したい。

### 三 ルソン島の戦い

#### 1 ルソン島の地理等

ルソン島は、図1のように、南北740km、東西225km、面積10・5万km<sup>2</sup>(日本の本州の1/2弱)の細長い島で、中部から北は長方形のよう

な形をしており、南東に細長くビコール半島が伸びている。

北部は、大部分が山岳地帯であり、大部隊の戦力発揮は道路沿いに限定される。この地域を南北に流れるカガヤン河沿いの地域は、比島の穀倉地帯であり、飛行場も多数存在していた。

中部は、平地が多く、比島最大の米作地帯であり、政経中枢のマニラ首都圏には人口が集中し、大市街地が形成されていた。

また、マニラ北西のクラーク地区に

は、大飛行場群があり、彼我制空権確保のための要地となっていた。

マニラ湾口のコレヒドール島には、米軍が構築した要塞があり、北方のバターン半島の陣地と相まって艦船の通過を制約した。

南部のビコール半島は、火山帯の細長い半島であり、大部隊の行動を制約した。

民族的には、マレー系が主であったが、中・米・スペインとの混血も多く、宗教的には、カソリック信者が多かった。

政治的には、日本の影響下にあった比国政府統治の下、親日派も多くいたものの、戦勢が米国有利に傾き、かつ米軍の活発な工作の結果、圧倒的に親米派が多くなり、抗日ゲリラの勢力は27万余に膨れ上がり、活動も逐次大規模・組織的となり、無視できない勢力に育っていた。

#### 2 第14方面軍の米軍進攻見積もり

米軍のルソン島進攻時期は、昭和20年1月上旬、進攻正面はバタングス又はリンガエンと見積もっていた。因みに大本営、南方総軍は、明春早期にバタングス又はマニラ正面に進攻と見積もっており、現地軍と上級司令部との間で緊迫感が異なっていた。

図1 ルソン島の地理

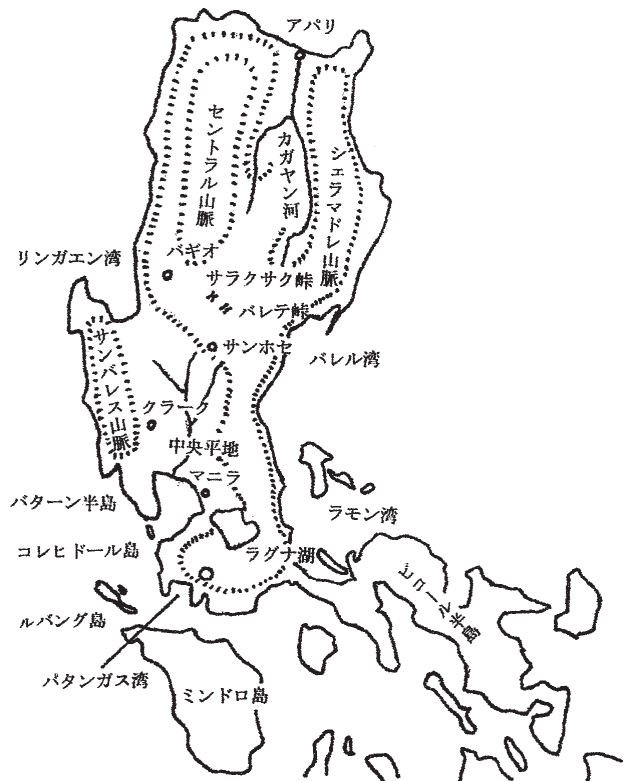
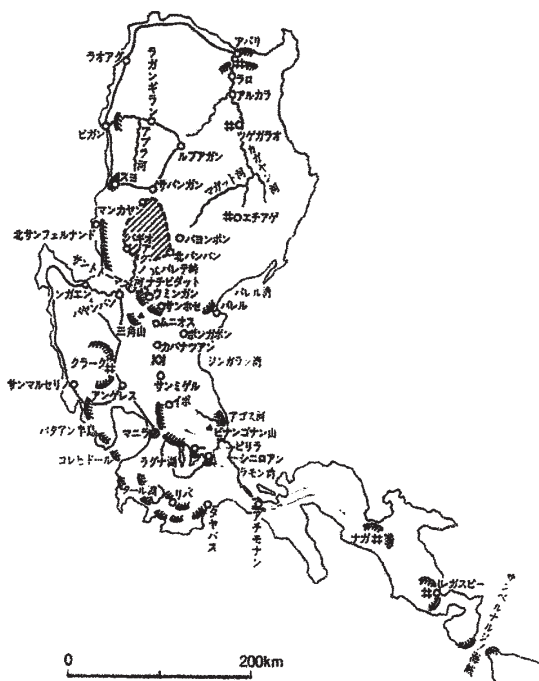


図2 方面軍のルソン島作戦構想



### 3 第14方面軍の作戦構想

方面軍は、レイテ決戦に多くの戦力を割かれたため、当初の「中部ルソン決戦構想」を、山地部が多く持久容易な「北部ルソン重視の持久作戦構想」に転換し、12月19日に次の作戦構想を下達した。

#### ルソン島作戦構想骨子（図2）

方針  
主力をもって北部ルソン地区に大拠点、各一部をもってマニラ東方山地及びクラーク西方山地に拠点を設定し、各々自活自戦、永久抗戦の態勢を整備し、米軍主力をルソン島に牽制拘

束する。

#### 指導要領

① 北部拠点守備部隊（方面軍直轄、4個歩兵師団、1個戦車師団基幹、尚武集団と呼称）

リンガエン東海岸からバレル湾北岸の線以北を確保し、自活自戦、永久抗戦の態勢を整え、敵主力を牽制拘束し、その戦力の減耗を策する。この間好機を捕捉し主力をもって攻勢を決定し、敵戦力の撃破に努める。止むを得ざるもダバオ拠点を確保する。

北海岸正面からの進攻に対しては、敵上陸企図の破砕に努め、爾後縦深陣

地により敵の内陸への進攻を阻止。

西海岸正面からの進攻に対しては、敵の滅殺に努め、爾後縦深陣地で敵を撃破。

② マニラ東方山地守備隊（長・8師

団長、2個師団、マニラ防衛隊、2個旅団基幹、後日振武集団を編成）  
敵の進攻に当たっては、上陸企図の破砕に努め、爾後マニラ東方山地の既設陣地により自活自戦、永久抗戦を継続し、敵戦力の滅殺、航空・艦船基地の使用妨害に努める。

マニラ市とその周辺は、靭強なる防衛戦闘を遂行し、敵戦力を滅殺、好機に乘じ主力をもって攻勢し、敵の撃破に努める。

③ クラーク地区守備隊（長・第1挺進集団司令官、滑空歩兵第2聯隊、機動歩兵第2聯隊、陸海軍航空部隊等の集成部隊基幹、後日建武集団を編成）  
クラーク飛行場群地区の拠点を確保し、その機能を發揮させるとともに、敵の使用をできるだけ長く妨害、爾後クラーク西方山地拠点において長期持久。

この作戦構想に基づき、第14方面軍隷下部隊は、各拠点陣地地区への部隊移動、補給品の前送・集積、拠点陣地の準備、民間人の動員と北部拠点への

輸送等多忙を極めたが、少ない輸送力（鉄道・自動車）、貧弱な道路網、米軍の砲爆撃、ゲリラの活動等により、作戦準備は困難を極めた。

特にクラーク拠点は、第4航空軍司令官がレイテ決戦に固執し、ルソン島作戦準備に非協力的であったため、準備が遅れていた。

また、自活自戦に必要な食料の調達・集積も住民の協力が十分でなく、必要な量を集積できなかった。

#### 4 米軍の進攻と爾後の戦闘推移

米軍は、昭和20年1月6日～8日にかけてリンガエン湾周辺の陣地に対し、徹底した事前の砲爆撃を実施し、9日朝から図3のように第6軍（8個師団基幹、17万5千人）の2個軍団、4個師団を並列して上陸を開始し、北部に上陸した2個師団をもって尚武集団の北部拠点陣地を攻撃。南部に上陸した2個師団をもってマニラに向かい南下した。

#### ① 北部拠点（尚武集団）の戦闘

第一波でリンガエン湾北部に上陸した、米第1軍団の2個師団（第43・第6師団）は、第43師団をもってリンガエン湾東側地区の第一線陣地（第23師団・第58旅団が陣地占領）を、第6師団をもって東方のサンホセ方面（第2戦車師団が陣地占領）を攻撃し、橋頭

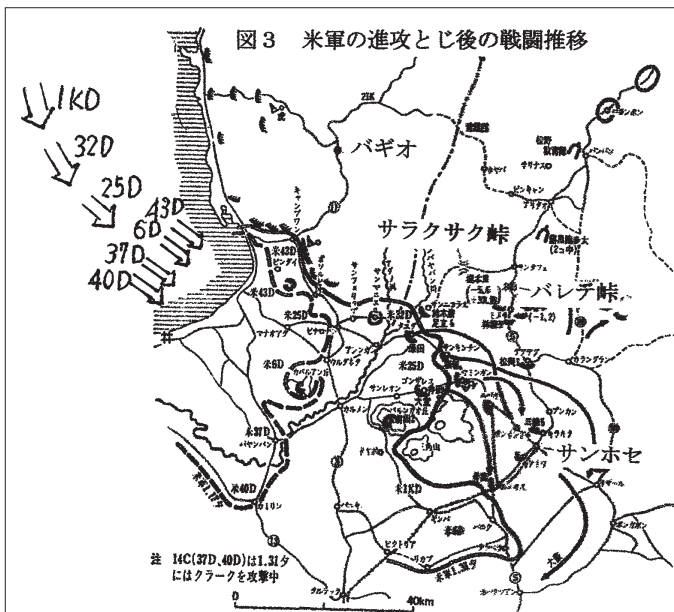


図3 米軍の進攻とじ後の戦闘推移

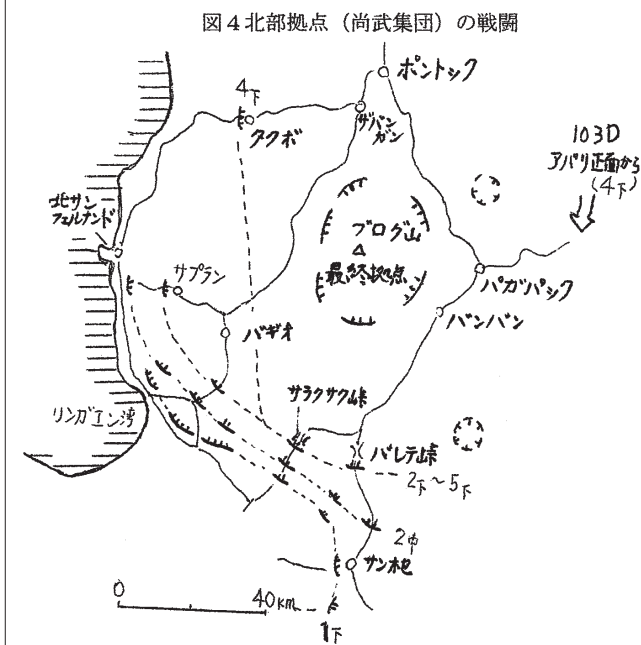


図4 北部拠点(尚武集団)の戦闘

堡を拡大した。次いで、第43師団と第6師団の間隙に、後続の3個師団(第25・第32・第1騎兵師団)を逐次投入し、北部拠点を攻撃した。

尚武集団は、陣地による抵抗と反撃

により、1月下旬頃まで、第一線陣地地域で一進一退の攻防を繰り返すが、2月上旬頃には、尚武集団の第一線陣地は逐次分断・包囲され、戦力も限界に達したため、逐次部隊を縦深陣地に後退させ、2月中旬には指揮・兵

站中枢のあるバギオ周辺拠点陣地とカガヤン河谷入口の要衝バレット峠とサラクサク峠を核心とする陣地(第10師団基幹が陣地占領)に後退し、抵抗を継続した。

バギオ複郭陣地を巡る戦いでは、尚武集団は、米軍の数度にわたる突破・迂回攻撃を撃退するが、4月には遂に米第37師団(マニラ攻略後転用した)の東海岸正面からの迂回突破を許し、4月23日にはバギオ拠点守備部隊のカ

ガヤン河谷正面への転進を命令。26日にはバギオが陥落した。

一方、尚武集団主力にとって最後の砦とも言えるバレット峠とサラクサク峠

を核心とする陣地に対し、米軍はバレット正面に第25師団、サラクサク正面に

第32師団を投入し、攻勢を強めた。尚武集団は、両峠を巡る戦いに3個

師団(第10・第105・第2戦車師団)基幹を投入し、両峠の確保に努めた。

両峠を巡る攻防は、3ヵ月余にわたる、彼我の戦力を磨り潰す一進一退の

凄惨な戦いとなったが、5月下旬〜6月上旬には、両守備隊は戦力の限界に達し、両峠は米軍の占領するところとなった。

更に6月23日には、米軍の空挺部隊が北方のアバリ正面に降下し、尚武集団を南北から挟撃したため、集団はブログ山〜カガヤン河谷周辺の山中の3拠点到分散蟠踞し、補給のない状況下で停戦まで組織的戦闘を続けた。

② クラーク拠点(建武集団)の戦闘

リングエン湾南部に上陸した米軍第14軍団の2個師団(第37・第40師団)は、ほとんど抵抗を受けることなく橋頭堡を確立し、引き続きマニラ奪還を目標に南下を続け、1月24日から図5のように建武集団のクラーク拠点に対する攻撃を開始した。

建武集団は、飛行場群周辺陣地で抵抗するが、30日には飛行場群は米軍の占領するところとなった。

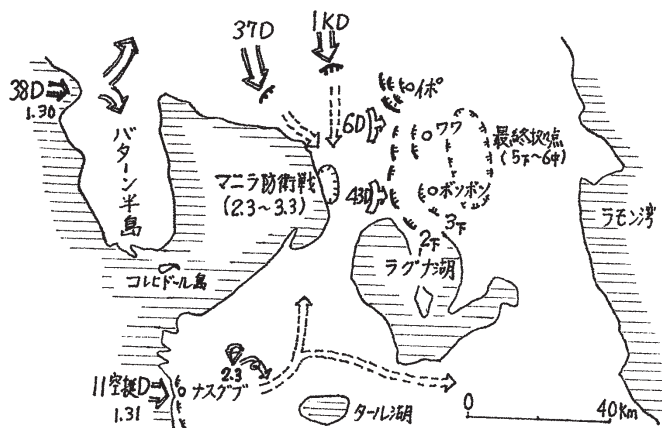
爾後、米第14軍団は、1個師団(第37師団)をもってマニラに向かって南下し、1個師団(第40師団)をもって建武集団のクラーク西方山地の最終拠点陣地を攻撃した。

建武集団は、拠点陣地で抵抗するが、4月中旬にはこれらの陣地も米軍の占領するところとなり、爾後、建武集団は組織を解体して小部隊に分散

図5 クラーク西方拠点(建武集団)の戦闘



図6 マニラ東方拠点(振武集団)の戦闘



し、ピナツボ山周辺山地で停戦まで戦いを続けた。

### ③ マニラ周辺(振武集団)の戦闘

米軍は、第37師団の南下に連携して、その東側に第1騎兵師団を投入し、2個師団を並列して南下させるとともに、1月30日には、第38師団基幹をバタイン半島付け根のスービック湾

に、翌31日からは、マニラ南西のナスブグ正面に第11空挺師団を着陸させ、マニラ奪還に向けて多方向から進撃を開始し、2月3日には、南下した2個

師団がマニラ市街地に突入した。

振武集団は、マニラ海軍防衛隊をもって激しい市街戦を展開するとともに、6個大隊をもって第1次総攻撃を実施したが、米軍に撃退され、3月3日には、マニラ市街地は、米軍の占領するところとなった。

約1カ月の戦闘により、マニラ市街地は廃墟と化し、10万人以上の市民が犠牲になったと言われているが、大部分は米軍の砲撃によるものだった。

マニラ奪還の目途を付けた米軍は、2月下旬には2個師団(第6、第43師団)をもって、振武集団のマニラ東方

山地拠点の第一線陣地に対する攻撃を開始した。

振武集団は、拠点陣地による防御戦と3月中旬の第2次総攻撃により米軍に大きな損害を与えたが、3月下旬には、第一線守備部隊は戦力の限界に達し、第2線陣地以後退した。

米軍は、4月上旬から更に1個師団

を投入し、3個師団をもって振武集団

の第2線陣地に対する攻撃を開始し、6月にはほぼ振武集団の陣地地域を占領した。戦闘推移は図6のとおりである。

爾後、振武集団は、小部隊に分散し、9月に入って停戦を知るまで、マニラ東方山地内で戦いを継続した。

### 四 その他の島嶼での戦闘

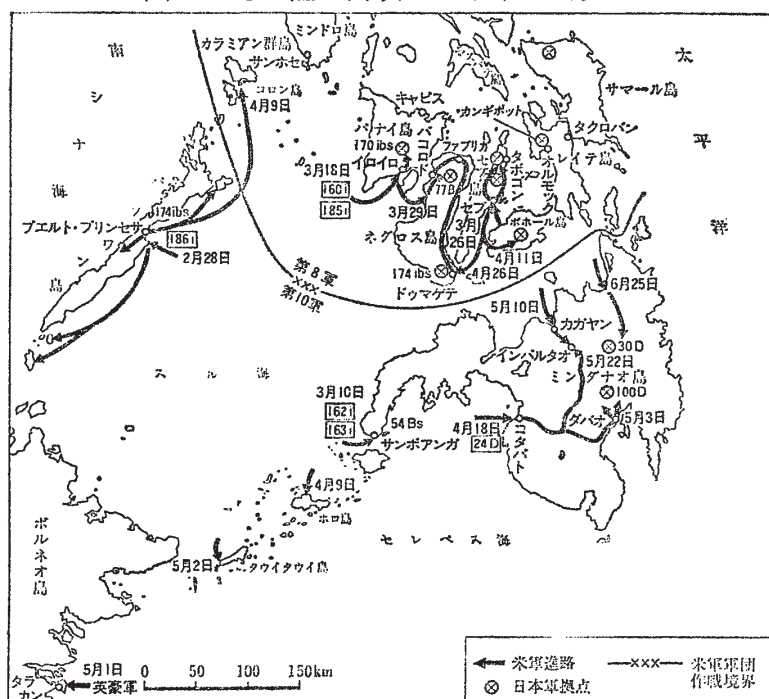
米軍は、ルソン島での戦闘に目途が付いた2月下旬以降、比島全域の奪還に着手し、図7のように残る島嶼に進攻し、6月末頃にはほぼ比島全域を占領した。

日本軍の島嶼守備部隊は、永久抗戦の方針に基づき、多くの部隊が米上陸部隊との抗戦の後も山中に潜み、停戦まで抵抗を続けている。

### 五 特攻作戦

海空戦力の懸隔から、敵艦を撃沈できるのは一撃必殺の特攻攻撃しかない」と判断した海軍は、レイテ決戦での栗田艦隊突入に連携して航空特攻作戦を開始し、爾後陸軍もこれに続き、比島作戦全体では665機の航空機が投入され、米軍に多大の損害を与えたものの、戦局を転換するには至らなかった。

図7 その他の島嶼への米軍の進攻



## 六 終戦後の状況

また、ルソン島の戦いには陸海軍の多数の特攻艇(陸軍の㊦、海軍の震洋)も投入されたが、上陸用舟艇等の一部に損害を与えたに止まった。

山下方面軍司令官は、8月15日に終戦の事実を知り、18日に終戦の詔書を病・飢餓あるいは戦間により

各部隊に複製配布し、9月2日、米軍に出頭し、翌3日に、バギオで降伏文書に署名している。方面軍のほとんどの部隊は、通信連絡、米軍の状況、ピラ等により終戦を知り、9月下旬までに各陣地から出て武装解除に応じているが、この間に疾病・飢餓あるいは戦間により

表 比島作戦参加者と戦没者

|    | 作戦参加者(名)  | 戦没者(名)  |
|----|---|---------|
| 陸軍 | 503,606   | 369,029 |
| 海軍 | 127,361   | 107,747 |
| 総計 | 630,967   | 476,776 |
| 備考 | 数字は、S33年厚生省発表数字<br>戦没者はその後増加し現在は厚労省によると518,000名 |         |



戦後29年間戦い続けた小野田少尉

い。特に、日本の捲土重来を信じ、ルパン島で戦後29年間も戦い続けた小野田寛郎少尉(故人)のことは国民等しく心に留めておくべきことと思う。

## 七 比島における慰霊

### 1 遺骨収容・帰還事業

比島の戦いには63万余名が参戦したが、戦没者は上表のように、昭和33年当時は47万余名が確認されていたが、その後も増え続け、現在は51万8千余名が認定されており、比島作戦では、大東亜戦争中のどの戦域よりも多くの戦没者を出している。

これら戦没者の御遺骨で、収容帰還したものは14万8520柱(約29%)に過ぎず、約37万柱の御遺骨が現地に遺されたままである。

特に、平成23年に「現地人が先祖の墓を掘り起こして収集した多くの遺骨を買い取り、戦没者遺骨と称して日本に持ち帰った」という事実が明らかとなって以降中断したままである。

現在厚生労働省は、再開に向けてフィリピン政府と協定締結に努力中とのことであり、早期実現を期待したい。

### 2 戦没者の慰霊

日本政府は、比島の戦いにおける戦没者を慰霊するため、昭和48年3月にラグナ湖南側のラグナカリラヤに国



フィリピン国立慰霊碑と慰霊祭  
(ルソン島ラグナ州カリラヤ)



フィリピン・カリラヤ慰霊公園全景

## お知らせ

カリラヤ慰霊公園内に個人または、団体で慰霊碑等を建立されていた方々にお知らせいたします。

この地は、フィリピン電力公社が管理している土地であり、当社の許可を得ず慰霊碑等を建立することを禁止しております。

今後、これらの慰霊碑等については、景観保護上問題がありますので、同公園内の日本国の慰霊碑敷地内に現形を保った上で埋設しましたので、ご理解の程よろしくお願い申し上げます。

なお、本件に関するお問い合わせにつきましては、下記までお願いいたします。

平成21年3月14日

フィリピン電力公社

(問い合わせ先)

厚生労働省社会・援護局保健企画課外事業

民間建立慰霊碑整理の立札

立慰霊碑を建立するとともに、周辺に広大な日本庭園を造園し、フィリピン政府に寄贈。管理をフィリピン電力公社に委託し、良好な状態で維持されている。

戦友遺族会が、その後カリラヤ墓地に建立した慰霊碑は、美観や管理面から国立慰霊碑周辺に集約して埋設されているとのことである。

## 八 終わりに

比島の戦いは、正に日米両軍が全力を傾注した戦いであった。

マッカーサー総司令官が日本本土進攻に使用を予定していた部隊主力を、約10ヵ月間にわたって比島に拘束し、持久目的を十分達成したこの戦いは、

米軍の戦史の中でも賞揚されている。この持久目的が達成できた原因は、次のように要約できると思う。

① 山下方面軍司令官の卓越した指揮統率

ア レイテ決戦に固執する上級司令部を説き伏せ、レイテ決戦を早期に見切るとともに、ルソン島の戦いを「中部平地決戦構想」から「3大拠点維持構想」に転換し、短期間で作戦準備を完整し、我が軍に有利な戦場で戦えるよう指導したこと。

イ 疾病と飢餓に苦しむ各部隊に対し

ても、玉砕を戒め、最後の一兵まで、自活自戦、永久抗戦に徹するよう指導したこと。

② 補給途絶下、疾病と飢餓、弾薬・糧食の欠乏、米軍の攻撃、住民のゲリラ活動等に苦しみながら、戦い続けた将兵の善戦敢闘。

山下方面軍司令官は、終戦後マニラの軍事法廷で裁判にかけられるが、マレー半島の戦いと比島の戦いの責めを一身に負って裁判に臨まれたという。

山下大将は、昭和20年12月7日に死刑の判決を受け、昭和21年2月23日に刑が執行されたが、その時に遺された辞世の和歌を次に紹介したい。

あとなしたい 我もゆきなむ  
この稿の執筆中に、今年初めにも天皇、皇后両陛下がフィリピン共和国との国交樹立60周年を記念して、戦後初めてフィリピンを訪問されることが宮内庁から発表された。

訪問計画は、両陛下の戦没者に対する御心も考慮して立てられるとのことである。

比島で戦没された51万8000余の御英霊も鶴首して両陛下のご訪問、慰霊碑参拝をお待ちのことと思う。

これを機に、フィリピンにおける遺骨収容帰還事業が再開され、多くの御遺骨が早期に祖国へ帰還できることを願ってこの稿を閉じることとする。

## 拉孟守備隊の戦闘と慰霊②

常務理事兼事務局長

岩田 司朗

一 はじめに

二 昭和17年～19年頃の雲南及び北ビルマの全般情勢

三 第1期戦闘経過の概要（昭和19年6月1日～8月2日）

四 第2期戦闘経過の概要（昭和19年8月2日～8月22日）

五 守備隊の玉砕

（以上「拉孟守備隊の戦闘と慰霊①」として、前号「慰霊」第35号（平成27年9月1日発行）11頁～13頁に掲載。）



### 六 拉孟玉砕戦の生存者

拉孟守備隊は、全員が壮絶な戦闘を経て玉砕したが、20名乃至30名が陣地から脱出し、あるいは捕虜となって命を取り留めた人々がいる。

そんな中で、金光守備隊長の命令により、玉砕寸前の拉孟陣地から脱出を図り、無事、龍陵の兵団司令部に行き着いた将兵がいる。

野砲兵第56聯隊第3大隊第7中隊付として、昭和19年5月初めに赴任してきた木下昌巳中尉（8月1日付で中尉に進級）は、8月11日、音部山の守備

隊本部に呼ばれ、金光守備隊長から、次のように言われた。

「守備隊が最後を迎えたら、貴官は陣地を脱出して、龍陵の司令部へ戦況報告に行ってもらいたい」と。

死ぬと分かっている将兵を残して、自分だけ陣地を脱出することはできないとの思いから、その命令には従えない旨を伝えると、金光守備隊長は、「貴官の気持ちはよく分かる。だが、もう少しよく考えてもらいたい。ここで全員が死んでしまったら、長い間の守備隊の苦勞が師団に分かつてもらえないではないか。それに、戦死した将兵の遺族に対して、誰がこの状況を伝えるのか。それから後世に対しても、子々孫々に至るまで、この拉孟の戦闘の模様を伝えねばならぬ義務があると思う。」

このことは、松井聯隊長殿にも師団司令部にも既に報告してあるので、貴官に是非やつてもらいたい。これは守備隊長の命令だ。

もし内地に帰る機会があれば、戦死した将兵の遺族にも戦闘の模様を伝えてもらいたい。それから、脱出する時には、1、2名、伝令を連れて行け」と。

9月7日、金光少佐から守備隊の指揮を受け継いだ真鍋大尉から改めて脱出の命令を受け、木下中尉以下3名は拉孟陣地からの脱出を図った。

雲南遠征軍の重囲をかい潜り、木下中尉らは、9月11日夕刻、無事に第56師団歩兵団司令部に辿り着いた。

終戦後、復員した木下中尉は、拉孟守備隊将兵の御遺族をくまなく訪ね歩き、勇戦敢闘の状況を報告されたとのことである。

### 七 拉孟の現況、慰霊巡拝

2012（平成24）年4月末、遠藤女史は、拉孟を訪れ、その様子を、前掲の著書の中で、次のように記述している。

「拉孟の赤土を踏んだ時の感動は、今なお消え去らない。雨上がりの山上の戦場跡は、松林の匂いがたちこめ、雨



惠通橋から紅旗橋を望む  
（「養口一哲著「戦場取材の旅」」）

季の最中の拉孟戦の臨場感を十分に味わうことができた。拉孟では米軍機による空爆が間断なく続き、1日、数千発もの爆弾が投下されたという記録がある。これまで生存者から聞いた拉孟戦場の痕跡も目の当たりにした。「地隙」を利用した中国軍の交通壕も当時の姿のまま残っている。地隙とは、雲南地方の特殊な地形で、浅いもので2メートル、時には数十メートルもの深い溝が松山の四方に延びている。拉孟陣地の至る所にこのような地隙が残っていた。元拉孟守備兵の早見正則さんによれば、この溝に多くの日本兵の死体が転がっていたという。壕は豪雨と空爆で崩壊し、糞尿と赤泥土と血が混じる凄惨な状況だったという。そんな戦場の様子が目に見えるようで、私は赤泥土に立ちすくんだ。

中国では現在も引き続き旧日本軍の遺骨収集は許されていない。異郷の地で果てた拉孟守備兵の夥しい遺骨は、今なお故郷に帰ることもできず、人里離れた松林の山上のどこかで眠っている。若い兵士たちは、最後に何を思っこの松山で死んでいったのだろうか。足元の濡れた赤泥土に兵士たちの靈魂が練り込まれているように感じた。

平田さんは、1998（平成10）年11月にも拉孟陣地を訪れているが、当

時は山頂の陣地まで急な斜面を自力で登るほかに、高齢の元将兵らには体力的に厳しいものがあつた。ところが、今回私たちが訪れた時には、山の斜面に木製の遊歩道や階段が建設中であつた。最近、松山の拉孟陣地は、「愛国主義教育」の観光スポットになつていようだ。私たちが宿泊していた龍陵賓館の部屋のガイドブックにも、松山（拉孟）で「愛国主義教育」を受けている中学生の写真が掲載されていた。・・・（中略）・・・

雲南西部の戦場跡を歩いてみて、想像以上に戦争遺跡が整備、保存されていることに驚いた。戦場跡の建立年月日を見るといずれも新しく、私が見た中では2004年以降のものが多く。その頃から雲南戦の戦跡の保存、整備が積極的に行われてきたようである。その理由は何か。1980年代頃までは、中国政府は、中国が唯一完全勝利した雲南戦の担い手が蒋介石の国民政府軍であつたことから、拉孟戦や騰越戦は、ずっと黙殺し続けてきた。ところが、1990年代の江沢民政権期になつて、歴史認識問題などで愛国主義教育の機運が高まるなか、雲南戦において日本軍の侵略戦争の史実の証拠収集が盛んに行われるようになったという。1994（平成6）年9月には、

党中央宣伝部の名で「愛国主義教育実施綱領」が公布された。

こうして中国政府は、近年、「歴史の空白」をようやく埋め始めている。ただし、雲南戦跡に刻まれた文言をよく見ると、雲南戦は、あたかも共産党軍が主導の戦争であつたかのように再解釈されて記録されていることが分かる。

また、著者は、拉孟守備隊と同時期の1944（昭和19）年9月14日、守備隊2000名が玉砕した、騰越の戦場跡を訪れ、次のように語っている。

「騰越にある『国殤墓苑』を訪ねた。

1945（昭和20）年、蒋介石政權下において雲南戦で戦死した中国兵の墓苑である。ここには、滇西抗戦記念館



国殤墓苑にある「倭塚」

が併設されている。広大な敷地に入ると、まず目に付くのは高さ一メートル直経一メートル半ほどの饅頭状の『倭塚』だ。筆跡は李根源（1879年～1965年）は雲南省出身の有名な軍人、政治家である。国殤墓苑は中国軍の戦没者の墓苑だが、『倭塚』は日本兵（4名）を葬った墓だという。他所では見かけない珍しいものだ。・・・（中略）・・・この国殤墓苑は、1945（昭和20）年7月7日、李根源の提唱で建設された。戦没中国兵九千名の墓苑であり、その中に、米軍将校十九名の慰霊碑がある。隣接した場所に、2004（平成14）年9月24日の日付の、「米中両軍の若い兵士らの犠牲の哀悼と米中友好を求める」という内容のブッシュ米大統領の書簡が透明のパネルでカバーし展示されている。

これからも、中国政府の愛国主義教育の中にちりばめられた第二次大戦における同じ連合国としての親米傾向がうかがわれる。

中国共産党の愛国主義教育の意図について、今回の旅の同行者の一人、近代中国の政治、文化、経済に詳しい樋泉克夫教授（愛知大学）は、次のように話した。

「わずかに数日の経験からの判断だが、

共産党政府は国境を越えた南の地域とより緊密な一体化を進めることで滇西地方、つまり雲南省西部における経済開発を目指しているようだ。国境を越えた広い地域の一体化には『抗日戦争』を持ち出すのが得策という考えではなからうか」

中国政府は、およそ一〇年前から積極的に雲南戦線の戦跡の整備、保存を行っている。同政府の雲南戦跡保存の意図の中には、愛国主義教育の進展に加え、中国雲南と東南アジア諸地域の一体化を図るための政治的、経済的思惑が多分に絡み合っているようだ。・・・（後略）・・・

厚生労働省の資料によると、中国には、東北部（ノモンハンを含む）に20万6000余柱、その他の地域に2700余柱の御遺骨が、未収容となっている。両国間の政治情勢からその収容帰還事業が難しいとのことであるが、外交努力により、先ずは関連情報収集の糸口でも掴んでもらいたいものである。

（注）本稿は、特に出典の記述がないものについては、『雲南正面の作戦（ビルマ北部の決戦）』陸戦史研究普及会編（原書房刊）、『悲劇の戦場（ビルマ戦記）』丸別冊（潮書房刊）から引用した。）

「編注・次の論稿は、ガダルカナル島未送還遺骨情報収集活動に参加された靖國神社権禰宜 後藤智司氏の報告記で、靖國神社の社報『靖國』第724号（平成27年11月1日発行）に掲載されたものであるが、お許しを得て転載させていただいた。」

## ガダルカナル島未送還遺骨情報収集活動に参加して

靖國神社権禰宜 後藤 智司

この度、8月29日より9月12日まで全国ソロモン会、NPO法人JYMA日本青年遺骨収集団主催ガダルカナル島未送還遺骨情報収集活動第五次自主派遣隊が結成され、後半の8日間に、靖國神社から私と白江主典の2名が参加した。

昨年実施された第四次隊の活動場所である通称「丸山道」の第一野戦病院仮設地と異なり、そこから約6キロほど北西方向の地域（ベラバウ）及びタナビーチにて収骨活動を行った。我々のベラバウ組一行は午前6時半ホテルを出発し、午前7時頃中継地のバラナ村において現地人スタッフと合流し、更に未舗装路を車にて30分程進んだ。ジャングルに入ると、現地人スタッフ

りながら約20分進んだ場所を拠点と定めて、この周囲で活動を行った。そこはかつて第一二四聯隊が米軍と対峙し戦闘が行われた地域であり、1980年代にも遺骨収集活動行われた。しかし、現地のソロモン人の村長の話によると、まだ多数の遺骨が未収集の可能性があると、今回この場所での活動が実施されたのだった。

我々は日本人2〜3名、現地ソロモン人4〜5名ずつの4組に分かれ、日本軍の陣地として使用したと思われる斜面を探索した。後線より数メートル下がった辺りで早速指や腕と思われる骨、更に見立て45度程の急斜面を40〜50メートル程下がった辺りで頭骨の一

部が発見された。ここで見つかった骨はいずれも部分的なものでばかりで、現地のソロモン人によると長年の風雨により斜面を流されたものであろうとのことだった。

翌日は更に下方の川沿い、あるいは野戦病院跡地と思われる場所で活動が行われた。前日同様、多数の骨片や頭骨が発見され、同時に写真のフィルムやボタン、ガスマスクのガラス部分、薬品ビンや薬莢、「軍用」の文字の入った歯ブラシ等も発掘された。かつて日本人が、確かにここで戦っていたという「証」とも言えるこれらの遺留品を手に、しばし往時に思いを馳せると、非常に感慨深いものがあつた。しか

し、これらの品々は国外への持ち出しが出来ないため、焼骨式で御遺骨と一緒に焼却し、燃え残った灰と共に現地に埋葬しなければならず、大変複雑な思いであつた。

タナビーチでは、一柱分の上半身のほぼ全体が発見され収骨した。また、ベラバウ方面では、約六〜七柱を収骨した。また、現地に在住し収骨活動を続けている邦人や献身的なソロモン人の協力により、本年は合計一〇八柱の御遺骨を収骨することが出来た。

9日には、コカンボナ村にあるソロモン群島方面全戦没者慰霊碑の前において、厚生労働省主催の焼骨式が執り行われた。その後引き続き神式、仏



遺骨収容活動の様子



慰霊巡拝にて「海ゆかば」奉唱



御遺骨の焼骨式へ向かう隊員

式（日蓮宗）による慰霊祭・慰霊法要が厳粛に斎行された。

翌日は、輸送船鬼怒川丸が座礁したまま遺されている海岸やムカデ高地等にある島内の慰霊碑において拝礼式及び法要を執り行い、ビル村博物館を見学した。

今回の活動で、戦後70年を経た今日でも、未だに多くの御遺骨が収容されないまま国外に遺されている現状を目の当たりにした。私達は、御遺骨を早く祖国へお還ししたいとの思いを強くした。そして「白木の箱のみが帰ってきた」と御遺族から伺った話を思い出し、見知らぬ土地で散華された英霊、そして遺された御家族の心情を思うと胸が詰まる思いがした。

今回の派遣を通して、実際に多くの将兵が、その身の果てた地に顔づくとき、戦没された英霊の思いを今後も正しい形で継承していかなければならないと決意した次第である。

この貴重な経験を活かし、今後の奉仕に励む所存である。



表題は、当協議会の参加団体である「特定非営利活動法人JYMA日本青年遺骨収集体」（平成20年度に改名、ただし、登記上は「特定非営利活動法人ジェイワイエムエイ」と表示、英文表記は「Japan Youth Memorial Association」略称「NJOJYMA」）の機関紙（月刊）の題字であるが、その第188号（平成27年11月1日発行）に、ガダルカナル島未送還遺骨情報収集第五次自主派遣（平成27年8月29日～9月12日）及び旧ソ連（イルクーツク州）抑留中死亡者遺骨収集帰還派遣（平成27年7月15日～29日）に、それぞれ参加した隊員の感銘深い報告記が掲載されているので、今回もご了承を得てその一部を転載させていただいた。

## ◆ ◆ ◆ 【ガダルカナル島 第五次自主派遣報告】

### 涙 雨

関東学院大学一年 松井恵理子

「これは英霊の涙雨ですね。」指揮隊長のこんな言葉が今も心に印象深く残っている。旧第一野戦病院跡地での活動初日、応援団到着日等々、今次派遣では所々で雨天が見られた。彼の地に眠る英霊たちが流した涙の表れで

あったのだろうか。遺骨収容活動をする者として、また、一人の日本人として自分がガダルカナル島を訪れた意義を考えながら、去る2週間を振り返ってみようと思う。

成田を発って約16時間が経とうとした頃、飛行機の中から見えた密林を目にした時、自分が本当にガダルカナルにきたことを痛感させられた。

旧第一野戦病院跡での活動初日の朝は強い雨に見舞われた。バラナ村へ向かう車両内で、冒頭に述べた指揮隊長の言葉を聞き、その瞬間雨の音が一層強くなったように思われた。しかし、バラナ村に到着し、活動地に入るまでには、空には陽が差し暑いほどになった。打って変わった空の様子はまるで笑顔のようで、この時から、恥ずかしい話であるが、空を見てこの地で散華された英霊たちに思いを馳せるようになった。

旧野戦病院跡の活動地は想像以上の密林で、5メートル先を一人で行けば迷ってしまうほどであった。70年前、ここに体を寝かされ、空を仰いだ英霊たちは何を思ったのだろうか。遠い故郷で自分の帰りを待つ家族だろうか。恋人だろうか。そう思うと一刻でも早く故郷へお帰ししなければならぬと強く感じた。

木が隙間なく生い茂っているため、

陽の暑さは感じなかったが、気温30度はあるので水分が失われる。こまめに水分補給をしながら、小隊へ振り分けられたソロモン人の案内に従い、手探りで土を掘った。小隊長の所持する金属探知機が反応する箇所を掘る度に遺留品の数々を発見した。当時を偲ばせる錆びた鉄塊や銃弾は、確かにここに人がいたことを物語っていた。時折風

が流れ木々の連が聞こえた。70余年前も同じ風の音を聞いたのだろうか。活動日自体は6日間あり、今次派遣では本隊で9柱の御遺骨を収容することができた。私自身が収容した御遺骨は、いずれも骨片であったが、自身の手で御遺骨を収容した時は、喜びさえ覚えたものだった。温暖な地の御遺骨は非常に多く、土に還ろうとしている。手に取ると崩れてしまいうような御遺骨は、流れ去った月日の長さをいやでも感じさせた。こんなにも長い間、こんなにも日本から遠く離れた場所で眠り続けていたことに、私は深い悲しみを覚えた。探索活動場所は、隊員皆が夢中で活動するために静寂が流れる。ふと周りを見渡した時、ジャングルのその寂寥とした、あるいは穏やかとも言うべき空気に言いようのない哀愁を覚えた。かつてここに在ったであろう喧騒は、時を経て自然の中に飲まれている。野

戦病院跡で私が初めて骨片を発見した時、滴るような弱い雨が降った。それはまるで、本当に涙のようです。土を掘る手を休められなくなりました。

1日の捜索時間はどうしても限られてしまうため、毎日活動終了時間はやるせなさも積もる。しかし、例えばどんなに小さな骨片であっても、日本にお帰しすることができればのならば嬉しい限りであると思う。今次派遣の中で、この島の持つ過去に触れ、過去の史実をどう認識し、今の自分と向き合っていくべきかという問いが自分の中に生まれた。ガダルカナルを訪れた意義は、色濃く戦の傷跡が残る島で、自分が感じたものものの感情、それにゆっくりと向き合うことができたことだと思ふ。

最後に崎津隊長を始め、多くの関係者の皆様のお蔭で今次派遣を無事終えることができました。誠に有り難うございました。

## 「旧ソ連抑留中死亡者遺骨収集帰還派遣（イルクーツク州）報告」

### イルクーツク派遣に参加して

駒澤大学三年 堀口 舞

今次派遣は、ロシア連邦イルクーツク州ウソリーエ・シビルスコエ市マリ

タ村集団埋葬地にて活動を行い、当法人から堀口舞（駒澤大学三年）と北村奈緒香（立命館アジア太平洋大学二年）が参加した。

成田空港を出発し、ハバロフスクでイルクーツク行きの国内線に乗り換え、ハバロフスクは大荒れの天気、ダンボール等の団装備品が濡れてしまふなど大変な長距離の移動であった。そんな日本から遠く離れたマリタ村に到着し、早速翌日から活動を開始した。マリタ村集団埋葬地は車の往来が激しい幹線道路のすぐ脇にあり、二つの慰霊碑が少し離れて並んで建っている場所、二〇〇柱を超える抑留中死亡者が埋葬されているという記録が残っている。

収容活動初日、慰霊碑を大きく囲むように四角形を描き、その端から掘削を開始した。活動を開始して10分も経たないうちに御遺骨を発見、その隣、またその隣と順に掘り進めて行き、1週間の活動で80近い箇所を掘削、七六柱の御遺骨を発見、収容した。収容した御遺骨の状態は様々だが、そのほとんどが頭骨から足の指まで揃う完全体での発見であった。中には頭骨のみ発見できない御遺骨が数柱あり、一緒に病氣にかかっていたのでは、とのことだった。

実際はどのような理由からなのか、私たちには想像することしかできず、もどかしさを感じた。

慰霊碑を囲む柵を一時的に取り除き、慰霊碑周辺を掘削していた際、朽ち果てた白い箱を発見した。中を調べると、推定三柱の御遺骨が白布に包まれた状態で見付かり、御遺骨の上にはお札のような物が多数載せられていた。ここでも想像しかできないが、恐らく慰霊碑を建立した際に発見し、収容された御遺骨を安置していたのではないかとのことだった。御遺骨の状態は悪く、かなり時間が経っているように見えた。慰霊碑を建立してからどうして今まで安置され続けてきたのかは分からないが、今回派遣団が収容した御遺骨と共に日本にお帰しすることになった。

20歳前後のマリタ村の青年達が1週間におたる収容活動に協力してくれた。彼らの指揮者としてマリタ村会議員の女性たちも連日活動地に足を運んでくれ、昼食の支援など細かい点まで派遣団をサポートして下さった。

活動初日、互いに挨拶を済ませ、いよいよ掘削を始めようとすると、彼女が大きな声で何かを話し始めた。「今から捜索するのは決して物ではない。形は違えど、かつては今の私たちと同じように生きていた人間、失礼な言動は許さない」と。ロシア語は理解できないが、彼女の真剣な目と気持ちの籠もったその声で、亡くなった方に対する敬意が十分に伝わった。当たり前のことのように聞こえるが、活動を続けるうちに忘れてしまいがちな気持ちでもあると思う。

かつては敵だった日本人を想い、一杯の気持ちをもつてサポートしてくれたロシア人に感謝の念を抱くとともに、同じ日本人として改めて襟を正さなければいけないと感じた。最後に派遣中お世話になりました皆様に厚く御礼申し上げます。



左 堀口隊員、右 北村隊員



赤坂御用地内を散策されている三笠宮、同妃両殿下（平成27年11月16日）（宮内庁提供）

## 慶祝・百歳の御誕生日を迎えられた三笠宮崇仁親王殿下

昨年12月2日、当協議会の初代名誉総裁を務められた（平成17年7月～23年6月）三笠宮崇仁親王殿下には、百歳（百寿）の御誕生日を迎えられた。誠に慶賀にたえないところである。

宮内庁によると、明治以降で皇族が百歳を迎えられるのは初めて、とのことである。3年前に心臓手術をお受けになられたが、その後お元気で、赤坂御用地内の宮邸では、百合子妃殿下（92歳）と御一緒にダンベルで運動をされたり、庭内を散策されたりして過

ごしておられるとのことである。

御誕生日に当たり、「百歳を迎えるからといって、これまでと何ら変わることはありません。世界中の人々の幸せを願い、百合子に感謝しつつ、楽しく穏やかな日々を過ごしたいと思います」と、文書で所感を述べられた。

## 事務局からの報告等

一 平成27年度臨時理事会の開催  
平成27年10月27日（火）、当協議会会議室において、平成27年度臨時理事会を開催した。

本会議では、事務局からの提出議題等について、熱心な討議が交わされ、議案はそれぞれ原案どおり承認された。

### 1 議案

○第1号議案「財産運用の今後と「財産管理規定」の改正

○第2号議案「平成27年度上半期職務執行状況（報告）」

○第3号議案「平成27年度上半期予算執行状況（報告）」

○懇談・報告事項

・戦没者遺骨収集帰還事業促進化法案  
・「日本宝くじ協会の公益事業への助成」申請

### 2 出席者

理事11名中9名及び監事2名が出席した。

### 二 平成27年度第2回慰霊諸団体連絡会議の開催

平成27年12月10日（木）、靖国会館「玉垣の間」において、平成27年度第2回慰霊諸団体連絡会議を開催した。

本会議では、遺骨収集帰還事業推進法（案）に基づく指定法人の設立に関する意見・要望等について、活発な意見交換が行われた。

### 三 慰霊祭等への参加状況

#### 1 市ヶ谷台慰霊祭

平成27年9月16日（水）、市ヶ谷台駐屯地メモリアルゾーンにおいて、偕行社主催の慰霊祭が執り行われ、当協議会から柚木文夫理事長他1名が参列した。

#### 2 第64回特攻平和観音年次法要

平成27年9月23日（水）、世田谷山観音寺・特攻観音堂において、特攻隊戦没者慰霊顕彰会主催による第64回特攻平和観音年次法要が執り行われ、当協議会から圓藤春喜専務理事が参列した。

#### 3 靖國神社秋季大祭

平成27年10月18日、靖國神社秋季例

大祭が斎行され、当協議会から圓藤春喜専務理事が参列した。

#### 4 平成27年度秋季慰霊祭

平成27年10月19日（月）、千鳥ヶ淵戦没者墓苑において、同墓苑奉仕会主催による平成27年度秋季慰霊祭が執り行われ、当協議会から島村宜伸会長、柚木文夫理事長他2名が参列した。

#### 5 ソ連抑留犠牲者鎮魂慰霊祭

平成26年11月3日（火）、千鳥ヶ淵戦没者墓苑において、ソ連強制抑留戦友会東京ヤゴタ会主催によるソ連抑留犠牲者鎮魂慰霊祭が執り行われ、当協議会から岩田常務理事が参列した。

#### 6 慶應義塾戦没者追悼会

平成27年11月14日（土）、慶應義塾大学三田キャンパス北館ホールにおいて、慶應義塾戦没塾員追悼会が執り行われ、圓藤春喜専務理事が参列した。

### 四 硫黄島遺骨帰還通常派遣事業への参画

平成27年度第3回派遣が11月25日（水）から12月9日（水）までの間実施され、当協議会からの派遣団員として、隊友会2名が参加し、御遺骨の収容に献身されました。気温摂氏60度以上の高温多湿、狭い洞窟内での収容作業で、体力の消耗が著しく、大変御苦勞されたとのこと、お疲れ様でした。

今後の予定として、平成28年1月に第4回派遣が計画されています。

新入会員名簿（敬称略）

（平成27年8月1日～11月30日）

【賛助会員】（五十音順）

渥美 正明 伊東 健一  
小川 栄一 小野寺 功  
熊代 将起 五反田 勇一郎  
小林 博行 佐藤 龍己  
下村 博哉 菅原 秀人  
砂田 憲亨 中原 基喜  
成田 篤宣 野口 利保  
早川 公一郎 平田 智二  
古谷 洋作 松下 達夫  
松下 泰士 宮下 寿広  
山田 一生 吉田 助継  
・（株）再生日本21

（代表取締役 浅井 隆）

（平成27年9月1日入会）

賛助会員会費納入のお願い

本協議会は、会員の皆様からの貴重な会費で慰霊顕彰事業を運営しておりますが、皆様方のご理解と温かいご支援なくしては活動と継続することが困難となります。誠に恐縮に存じますが、平成27年度の賛助会員会費の納入につきまして、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

本年度会費未納の方には、振込用紙を同封しております。当協議会の事務処理との関係から、その後のご納金と本お願いが行き違いになるかもしれませんが、その場合は、平にご容赦を賜りますようお願い申し上げます。

会報『慰霊』第35号正誤表

次のとおり誤りがありましたので訂正し、謹んでお詫び申し上げます。

4頁3段目・写真説明（脚注）誤 山方孝次靖國神社権宮司 正 小方孝次靖國神社権宮司

ご寄稿についてのお願い

当協議会では、広報誌『慰霊』を、年4回（一月、四月、七月、十月）発行しています。各団体及び会員の皆様の積極的なご寄稿をお願い申し上げます。ご寄稿に際しましては、次の点にご留意くださるようお願いいたします。

- 1 原稿は、手書き、ワープロ・パソコン作成のいずれでも結構ですが、なるべく縦書き、1段17字詰めをお願いします。
- 2 記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当協議会事務局に任せ願います。
- 3 慰霊祭、行事等の写真がありましたら、なるべく添付してください。
- 4 原稿、写真等は、原則としてお返しいたしません、必要な場合は、その旨お書き添えください。
- 5 会報・機関誌、投稿記事等の送付先は、左記の当協議会事務局宛としてください。

記

〒102-0007 3  
東京都千代田区九段北3-1-1  
靖國神社遊就館内・地階  
（公財）大東亜戦争全戦没者  
慰霊団体協議会事務局  
電話 03-6380-8943  
FAX 03-6380-8952

当協議会会員ご入会のご案内

当協議会は、会員の皆様からの貴重な会費により、戦没者の慰霊顕彰事業を運営しております。

当協議会の活動にご理解をいただき、慰霊事業の永続を図るため、多くの方々の当協議会会員ご加入をお待ちしております。皆様のご協力をお願いいたします。

会員の区分と年会費は次のとおりです。

- 一 賛助会員  
（本会の趣旨に賛同する個人）  
年会費 三〇〇〇円
- 二 賛助特別会員  
（特別御芳志の賛助会員）  
年会費 五〇〇〇円
- 三 正会員  
（本会の趣旨に賛同する慰霊目的の法人・団体）  
年会費 一〇〇〇〇円
- 四 特別会員  
（本会の趣旨に賛同する法人・団体）  
年会費 一口一〇〇〇〇円  
（一口以上）